

トーマス・ヘップバーン

『オークニー諸島の貧困』(1760年) (1)*

Thomas Hepburn, *A Letter to a Gentleman from his Friend in Orkney, containing the True Causes of the Poverty of that Country* (1760)

古 家 弘 幸・訳

Thomas Hepburn is an eighteenth-century Presbyterian minister whose tract translated here presents a fine example of the work in political economy in the Scottish Enlightenment. In it Hepburn acutely analyses the main causes of the poverty of the Orkney Islands, a remote area of Scotland where he served for nearly two decades. His main purpose was to defend the Earl of Morton, a Scottish nobleman who had been involved in a bitterly-fought epic court case called the 'Pundlar Process', about tyranny and oppression with which he had been charged by his own vassals. Hepburn in the end remits the Earl of Morton, citing many reasons why the Islands were suffering from poverty, other than the alleged tyranny and oppression. Hepburn is now an overlooked and almost forgotten figure who nonetheless shows how political economy characteristically emerged in the Scottish Enlightenment out of eighteenth-century British political culture and legal contexts.

Hiroyuki Furuya

JEL : B12

キーワード：オークニー諸島、貧困、モートン伯爵、圧制、派閥抗争

Key words : The Orkney Islands, Poverty, The Earl of Morton, Oppression, Faction

* 原本は、Hepburn, Thomas [1885] (1760) , *A Letter to a Gentleman from his Friend in Orkney, containing the True Causes of the Poverty of that Country*, William Brown, Edinburgh. 初版本はロンドンで 1760 年に出版され (44 ページ)、再版本は、新

以下の書簡は¹⁾、オークニー諸島のバーセイ教区の長老教会牧師、トーマス・ヘップバーン師によるものとされてきた。その分教区に言及している参考文献から与えられる内在的証拠は、その所説の真実性を確証するものである。

ヘップバーン氏は、イースト・ロジアン州²⁾の小作農の息子であり、1752 年にモートン伯爵が彼をバーセイの聖職禄に推薦したとき、聖職授任した。彼がアバレディー³⁾へ転任になる可能性が一時期あったように思われるものの、彼は 1771 年まで最初の任地に留まり、その後、生まれ故郷のアセルスタンフォード⁴⁾の司祭となった。

彼のやや冗長な書簡の編集者は、名前を明かさないが、彼による序文の広告で⁵⁾、モートン伯爵に対して彼の教区地主たちから起こされた圧制の告発について、彼が問い合わせたことへの返信として書簡を受け取ったと、私たちに伝えている。

書簡には 1757 年の日付が付いており、したがって、「パンドラー訴訟」として知られる訴訟によって⁶⁾、世間の注目がその問題に集まっていた時期に書かれたものである。その訴訟では、閣下のオークニー諸島の家臣たちが、オークニー諸島の衡量単位、あるいは永代租借地代が支払われる基準が不当にも増加させられてきたことを、証明しようと努めた。しかし控訴裁判所は彼らの訴えを退ける判決を出し、彼らはこの訴訟で敗訴したのであった。

私たちに伝えられるところでは、編集者が耳にしてきた「圧制についての数々の支離滅裂なうわさ」の根拠について、彼をして問い合わせしめ、また同

たな序文が付けられて、エディンバラで 1885 年に出版されている (60 ページ)。両版に異同はなく、本訳には再版本を用いた。トーマス・ヘップバーンと著書『オークニー諸島の貧困』に関する解説は、別稿に委ねたい。

- 1) 以下は、1885 年再版本に付けられた序文。
- 2) エディンバラの東に位置するスコットランド南東部の旧州。
- 3) イースト・ロジアン州の小都市。
- 4) イースト・ロジアン州の小都市ハディントンの近くの村。
- 5) 80 から 82 ページを参照。
- 6) 'Pundlar Process', printed legal papers, 333Y, Orkney Library. 「パンドラー」は、当時のオークニー諸島で現物地代の計算に使われた衡量機器。「パンドラー訴訟」は、衡量単位をめぐって、永代租借地代の受取人であるモートン伯爵と、支払人であるオークニー諸島の地主たちとの間で、1733 年から 59 年まで争われた裁判 (Thomson [1987], 231-2)。

古家：トーマス・ヘップバーン『オークニー諸島の貧困』（1760 年）（1）

時にオークニー諸島の実情に関して彼の好奇心をかき立てたのは、この訴訟であつた。

彼の問い合わせの手紙に対する返信は、モートン卿に対する抗議が不当なものであつたことを彼に確信させ、訴訟の判決が同じ方向を指し示していたことも相まって、彼が信ずるところでは、その司法の評決の妥当性についての偏見のない考証であると同時に、オークニー諸島の貧困の真の原因について、世論を啓蒙するのに適した題材でもあり、その出版を彼は決心したのであつた。

ヘップバーン氏の「公明正大さ」がどのようなものであつたにせよ、彼がそれらの「永代租借地代支払い者たち」または「地主たち」⁷⁾に偏見を持って肩入れしていたとは言えない。人間性という「神聖なる道義」が大部分は「完全に欠けている」と、彼らについて彼は書いている。「彼らは、短期の借地契約や、他の辛苦を与えて、小作農が持つ改良への熱意を押しつぶしてしまう」のであり、また地代は現物で支払うべきとされているため、「不足分については高額の代償が要求される」と、彼は断言している⁸⁾。

しかしながら、彼がオークニー諸島の貧困を帰しているのは、それらの理由にだけではない。大部分は、農業、放牧業、製造業についての小作農たちの無知と後進性、および彼の時代には「急速な発展」を遂げた唯一のものであつたように思われる密輸に対する彼らの愛好に帰しているのである。その他の興味深い詳細としては、奢侈がオークニー諸島に「あらゆる役に立たない流行のように、輸入されて」きたこと、「オークニー諸島では、スコットランドのもっとも富裕ないくつかの州においてよりも、国の富に比例して、お茶やパンチ、あらゆる種類の酒が多く飲まれており、絹糸、ビロード、キャンブリックや、他の美しい装飾品が多く使われている」ということを私たちは知るであろう⁹⁾。

これらのページでしばしば名前が言及されるモートン卿は、第 14 代モートン伯爵のジェイムズであり、「卓越した手腕と優れた学識を持った貴族」である。彼は 1738 年に爵位と所領を継承し、1739 年にはオークニー諸島を訪れて、

7) 「パンドラー訴訟」の原告側のこと。

8) 85 ページを参照。

9) 90 から 91 ページを参照。

バーレイのジェイムズ・ステュアート卿と口論になり、それは後者が「モートンに対する」人身襲撃の罪で収監されたことで終わった。この事件は 48 ページで言及されており、多くの悶着の始まりに過ぎないのであった。

モートンは 1742 年に、「オークニー伯爵領とシェトランド諸島の領有権を、彼および彼の法定相続人に永久に確定する」国会制定法を得たが¹⁰⁾、オークニー諸島に関して彼が巻き込まれるようになった反目や訴訟がよほどこたえたらしく、彼はオークニー諸島の彼の全ての資産を、ローレンス・ダングラス卿に売り払ってしまった。彼は 1768 年に、66 歳で死去した。

編集者¹¹⁾による広告

以下の書簡が執筆されたきっかけと、それを今この時期に出版する理由について、世間に知らせておくことも、不適切ではないと思われる。

きっかけとはこうである。自分の家臣たちに対してオークニー諸島の上位土地所有者である貴族によって行われてきたという圧制についての数々の支離滅裂なうわさを、過去数年間に渡って、編集者は耳にしてきたものであった。オークニー諸島の衡量単位に関する訴訟は、控訴裁判所においてかなり長い間未決のままであり、結局のところは圧制の憶測に基づいて起こされたのであるが、訴訟がこれらのうわさを助長し、それに真実性を付与しているようにも見えたものである。編集者はしかしながら、これまで上げられてきた騒ぎ立てを、スコットランドのあのように遠く離れた、あれほど未知の地域の事柄について、できる限り手に入れられる最も確実な情報を得るまでは、完全には信じていないことに決めた。

モートンが現在の幸福な体制の熱心な支持者であり¹²⁾、公共の自由を願い、

10) 国会制定法 (Act of Parliament) は、国王、(上院)、下院の 3 (2) 者の合意で成立する最高形式の法律。

11) 1760 年初版本の編集者。

12) 原文では頭文字の M だけで、残りは伏字になっているが、本訳文では「モートン」と明示する。ここで問題のモートン卿 (James Douglas, the 14th Earl of Morton, 1702-68) は、前出の 1885 年再版本の序文でも触れられている通り、オークニー諸島の上位土地所有者であった。

古家：トーマス・ヘップバーン『オークニー諸島の貧困』（1760 年）（1）

暴政と専横な権力の敵であることはよく知られていた。私生活における彼の名誉と清廉は、これまでのところ潔白で非難の余地がなく、閣下ほど哲学の知識や学識において非凡な人たちは、決して圧制の行為や権力の暴力的な行使で知られてはいない。

これらや、数々の他の考慮が、編集者をして、モートンに対する騒ぎ立ては根拠がないのではないかと疑わせしめたのである。しかしながら私は、それがどのような証拠と事実に基づいていたのかを知る機会が全くなかったので（そのうわさを信じた人たちですら、その点では同様であったと、今となってはあえて断言する）、オークニー諸島在住の友人に手紙を書くことに決めた次第である。この問題の真実に到達するために、彼の判断力と公明正大さは信頼できると考えたからである。

以下の書簡は、その問題について彼に送った全ての手紙に対する彼の回答である。この他にも編集者は、その出版を許可してくれたことに対して、そしてもし誰かが、書簡に含まれていると思ひ込むかも知れない何らかの誤りや虚偽によって感情を害されたと考えた場合、著者自身がそれを書いたことを認め、知っていることは真実であることを主張し、他の人たちに迷惑をかけない用意があると、世間と関係者全員に編集者が確約することを公認してくれたことに対して、寄稿者に謝意を表明するものである。実際、彼はこの種の事柄に対しては完全に寛大であるように思われる。

この書簡を今この時期に出版する理由とは、こうである。すなわち、オークニー諸島における交易や農業、水産業や製造業の現状について、書簡の中で与えられている数々の詳細な記述は、公表される価値があり、オークニー諸島と広くイギリス一般の双方にとって有益であろうからである。

控訴裁判所の判決においては珍しく、判事たち自身の自発的な全員一致で、オークニー諸島の衡量単位に関する訴訟が却下され、原告側からの訴訟費用全額の収用が宣告されたことは、圧制やこの訴訟に関してこの書簡で述べられて

アバディーンのマーシャル・コレッジ、ケンブリッジのキングズ・コレッジで学び、爵位継承後はロンドンの上院議会で議席を持つ当時の 16 人のスコットランド貴族のうちの一人となり、草創期の王立協会（The Royal Society）の会員でもあった（Fereday [1980], 36）。

いる全ての事柄を正当化するように思われる。

所有権の事柄に関する控訴裁判所の判決というものは、訴訟関係者のみに注目され、話題にされるものでしかないが、このオークニー諸島の衡量単位に関する訴訟は、その点で極めて稀な性質のものであり、ことによると、個人の人格を中傷し、最も悪質な中傷と最も不当な名誉毀損によって憎むべき人物に仕立て上げることで、貴族からその所領を剥奪するために起こされた初めての企てであった。

これらの中傷者たちは、権利と不可侵の自由などというもっともらしい口実で彼らの嘘を巧みに粉飾してきたが、もし彼らがモートンを最も不当にも告発したところの暴政と圧制に対して、自分たち自身が正当にも責めを負うべきであるならば、疑いもなく彼らは、あこぎな詐欺師、悪人として世間に暴露されるに値する。

もしこの書簡が、先入観を除去し、これまで隠蔽されてきたり、人為的に偽装されてきた真実を世間に知らしめる上で有用であるなら、そしてもしスコットランドのあの地域の農業、水産業、製造業にとって広く有利になるならば、これを出版しようという編集者の意図は、十分に叶えられることになるであろう。

編集者への書簡¹³⁾

拝啓

あなたのお望みでは、オークニー諸島の貧困のもっとも明白な理由について、私から知らせたいとのことであつた。ここしばらくの間、この話題について、多くが語られるのを聞いたからとのこと。そこで私は、この問題に関する私の所感を率直にお届けしたい。あなたのご期待に違わぬ満足を与えられることを望むばかりである。

13) 以下が、ヘップバーンの執筆による書簡の本文。

古家：トーマス・ヘップバーン『オークニー諸島の貧困』（1760 年）（1）

わが国のような自由国では、個々の地域の貧困は、以下に挙げる原因のうちのひとつかそれ以上に、帰せられるに違いない。つまり気候、土壌、位置、農業における改良の欠如、製造業と水産業の軽視、破壊的で違法な交易、奢侈、法律の効力を巧みにかいくぐって行われる圧制、そして最後に派閥抗争である。

I 気候¹⁴⁾

オークニー諸島の気候は、スコットランドの東部、および北東部地域の気候と、大して違わない。一般的に、天候はいつそう変わりやすく不確実であるが、それはオークニー諸島の占める位置に帰せられる。気候で最大の損害が引き起こされるのは、秋に風が主として西および南西から吹く時である。折に触れてこの風が、穀物を揺るのであるが、風は降り続く雨をしばしば伴うので、収穫期を遅らせ、また穀物を腐らせることでよりいつそう収穫を危うくしてしまうのである。しかしながら、農民たちによって行われる予防策は、この害悪そのものよりもさらにひどく、彼らはしばしば穂が出ないうちに、そして大抵は穂が実らないうちに、穀物を未熟なまま刈り取ってしまうのである。

II 土壌

オークニー諸島の可耕地は、一般に海岸沿いに位置する。ほとんどの場所は、よく熱を吸収しやすく、ふわふわの砂だらけの土壌である。場所によっては、申し分のないよく肥えた黒土である。内陸に向かうにつれて、土壌はより粘土質で熱を吸収しにくくなる。私はオークニー諸島では、強いしっかりした土地には、お目にかかったことがない。ここの土壌は厚くなく、底の方はたいてい岩だらけで、その岩ももろくて砕けやすい。全ての島で、豊富な海藻類に恵まれ、そのような種類の肥料が容易に入手できない場所でも、優良な泥炭土が大量にあるのだが、それは活用されることがほとんどなく、その技術もな

14) 原典には章分けも見出しもないが、本訳文では内容に即して、これらを付す。

い。剥き出しの地面とゴミの山といった光景には、しばしばお目にかかる。要するに、土壌と気候を合わせて考えると、オークニー諸島の土地は、スコットランド西海岸のどの場所よりも穀物栽培に適しており、スコットランド北東海岸部のほとんどの場所に劣らず放牧に向いている。

III 位置

スコットランドのいくつかの地域は、その場所のせいでやむを得ず貧困である。例えば、トウィードデール¹⁵⁾、ティヴィオットデール¹⁶⁾、ラマミュア¹⁷⁾、そしてハイランドの全ての内陸奥地では、住民は土壌と気候の不利益を、商業や水産業で埋め合わせることができない。海路を通じた、他の地域との交通がないからである。確かに肥育牛農家は一般的に富裕である。しかし完全に放牧に依存している国は、すべからず人口が少なく貧しいことも、同じくらい確かである。

オークニー諸島の位置は、住民の数と富を増やすのに、大変有利である。この島々が、交易をするのに非常に都合よく位置していることは、モルの地図に目を通せば誰でも分かるであろう¹⁸⁾。多くの良港と入り江に恵まれ、周辺の海域は、多種多様な魚に富んでいる。私が信じるところでは、ここでは（シェトランド諸島を除いて）スコットランドのどの場所よりも有利に、水産業（全ての業種の中で最も高収益で有益な産業）を確立し、営んでいくことができるのではないだろうか。スコットランドですら、より良い計画を立てれば活かされたかも知れない熱意と強みを欠いているとはいえ、漁業が大いに営まれているのだから。

15) スコットランド南部で、イングランドとの国境に近いボーダー地方。

16) 同じくボーダー地方の小都市ホーウィックの近くの谷間。

17) スコットランド南東部で、エディンバラのあるロジアン地方と、ボーダー地方にまたがって広がる丘陵地帯。

18) Moll, Herman [early eighteenth century], *A New and Correct Map of the Whole World*, London. ハーマン・モル (Herman Moll, 1654-1732) は彫版工で、ロンドンで地図作成と出版業を興して成功した。ジョナサン・スウィフトも、『ガリヴァー旅行記』の執筆に際して、モルの地図を参考にしたと言われている。

古家：トーマス・ヘップバーン『オークニー諸島の貧困』（1760 年）（1）

IV 農業における改良の欠如

農業の発展は、ご承知の通り、地主階級に大いに左右される。イングランドにおける農業の隆盛は、当地の地主階級の慈愛に負うところが大きいし、わがオークニー諸島の大部分の地主（laird）には、この神聖なる道義が完全に欠けているように見受けられる。彼らは短期の借地契約や、借地契約更新料、非常に多くの際限のない奉公や、それ以外にも数々の辛苦を与えて、小作農が持つ改良への熱意を押しつぶしてしまう。全ての地代は現物で支払うべきとされており、しばしば生ずる不足分には、高額の代償が要求される。そのため 2 年間の豊作も、1 年の凶作を埋め合わせるには不十分である。このような慣行は、多くの有害な結果を伴う。そして明らかに、少なくとも地代の半分以上が貨幣で支払われる方が、地主と借地農の双方にとって、より望ましいであろう。オークニー諸島は（並外れて豊作の時期を除いて）、地代を差し引いた後には、当地の住民を扶養するのに十分なものの以上の穀物を生産することはほとんどないからである。そして全体的に、住民の生計は大変貧しい。

これらすべての諸島では、農業の状態はひどく未発達である。借地農は耕作において、農地に大量の肥料を与える。そしてこれが、彼らが農業において幾分か精通していると言える唯一の部分である。彼らは農地を清潔に保ち、整理整頓しておく方策について全く無知なので、穀物はしばしば雑草にやられてしまい、収穫されるには不満足なものであり、痩せこけてひもじく、しばしば劣悪である。彼らは穀類の代わりに、小粒の未加工の大麦¹⁹⁾と黒いオート麦を作付けする。彼らの鋤は一本しか長柄がなく、鋤先の鉄器は不恰好で短すぎるので、鋤跡は浅くてまちまちになってしまい、しばしば手鋤で掘り返さなければならなくなる。彼らの碎土用農具は、小規模で軽装備であり、木材が使われている。彼らは台車や、鋤を付けた牛を使わず、彼らの馬も、ありふれたシェトランドポニーのようなものである。彼らはトウモロコシ農地を休閒しないが、内陸へ行くと一年は休閒する。ふるいや送風機を使わずに、トウモロコ

19) 古い時代の大麦（bear）で、ひいて粉にした後、パン種を入れないで作るバノックと呼ばれる円盤状のパンを作るのに用いられる。

シをすべて指先で選り分けるような国では、農業はいかに未発達であるに違いないことか？ 見事な牧草地を蹂躪してトウモロコシ畑に変えてしまうような彼らは、どの程度の小作農であるに違いないことか？ このような慣習があなたの見事な牧草地をすべて池や沼沢地に変えてしまいますよ、と言われて、「彼らが自分に地代を支払ってくれる限り、たとえ彼らが農地を所領の境界線まで拡張したとしても、自分の知ったことではない」と言い放った、この主だった教区地主のうちの一人について、あなたはどのように考えますか。もちろんこのような地主は、彼自身の真の利害に関して、借地農ほどの認識を得るようなこともあまりない。というのも借地農の方は、3 年の借地期間しかなく、その満了時には退去を覚悟しなければならず、借地期間の更新のために借地契約更新料を払ったとしても、それがこれまでの 3 年より長くなることもないからである。これとは別の著名な地主の借地契約においては、牧草地や草刈地を刈り込んだり鋤で掘ったりする権利に対して、実に詳細な規定がかぶせられている。オークニー諸島におけるゆゆしき農業の事例や、農業の発展を促進することこそまさに自分の利益になる当の地主たちによって小作農の向上心を妨げるのに用いられる数々のやり口をすべてあげつらうことは、あなたをうんざりさせることになるであろう。地主たちが借地農たちに改良の手本を示すことは全くなく、また借地農たちにそのような試みを誓わせることもない。そのような試みは、必ずしも成功しなくとも、地主たちにそれほど損害を与えるわけでもないことは確かなのだけれども。実際のところ、たかだか 3 年の借地権では、どんな借地農でも、これまで通りの行動から飛躍することは、実に馬鹿げたことになってしまうであろう。要するに、地主と借地農の協力は完全に欠如している。しかしそれが念入りな経験と観察を伴うならば、当初の企てではうまくいかないかもしれないことを直に修正し、当地の土壌と気候の性質に、多くの貴重な改良を適合させることも可能になるであろう。

オークニー諸島の人々は、耕作と同じくらい、放牧の技能においても欠けている。ちょうど彼らのトウモロコシ畑のほとんどが離ればなれに分断されているように、彼らの放牧地のほとんどが入会地にある。このように耕作地に取り囲まれている入会地というものは、借地農が大量の芝生を野焼きし、その灰を

古家：トーマス・ヘップバーン『オークニー諸島の貧困』（1760 年）（1）

馬や乳牛の寝藁に使ったり、他の場所に撒き散らしたりするため、毎年のように彼らに蹂躪されてかなり痩せている。丘陵地での放牧は、黒牛や羊が、どちらも現在の 10 倍の頭数を飼うことができるのであるが、あまり充分には放牧されていない。一般に彼らの飼う羊は、見張りもないまま野飼いにしてある。放牧がトウモロコシ畑のすぐ近くで行われている場合、羊は縄でつながれているか、ビーグル犬のように 2 頭ずつつながれている。彼らは羊からは乳を搾らない。彼らは羊毛を刈り込む代わりに、素手で皮から羊毛をむしり取るので、あまり羊毛が手に入らず、しかも粗末でがさつな品質なので、彼らは毎年、リース²⁰⁾やシェトランドから大量の羊毛を輸入しなければならなくなる。彼らの飼う豚もまた、野飼いになっており、牧草地やトウモロコシ畑を荒々しく走り回って、食べ物を捜すため鼻で地面を掘り返して凸凹にしてしまうので、豚がもたらす価値以上の損害をもたらす。私は断言するが、私はオート麦が、このような恐るべき種類の耕作法しか持たない土地に播かれるのを見てきたのである。乳牛、羊、豚ともに、大きさは小型である。これらの家畜は、適切な飼育が少なからず欠如してきたために退化してきたのだと、私は推察する。彼らには牧夫がほとんどいないので、彼らの野飼いの家畜が夏の夜に侵入してくるのに対して囲いの防壁でうまく防護されていないトウモロコシは、損害をこうむる。樹木も低木もないオークニー諸島では、植林がもたらす有益かつ風致上の改良について、極めて軽視されている。あらゆる種類の水生樹木が、オークニー諸島の本島のほとんどの場所では育ちそうなものだとは誰でも思うところだが、この面での改良について妥当な努力がなされたためしは、かつて一度もない。

V 製造業と水産業の軽視

オークニー諸島では、製造業がたった一種類だけ営まれているが、それは亜麻糸の紡績業である。紡績業は、すべての新基軸がそうであるように、未開で

20) エディンバラの港。

無知な人たちに当初はあまり歓迎されなかったが、大多数の人たちは今では紡績業に馴染んでいる。それもそのはず、紡績業は彼らの多くに、かつて稼いでいたのが 1 シリングだとすると、毎年 1 ポンドもの収入をもたらしているのである。この製造業のおかげで、最貧層の人たちの間に分配された所得は、今年も昨年も、それがなければ困窮で飢え死にしていたに違いない彼らの多くの生活を守ったと、私は確信している。法律で運営されているこの事業によって、オークニー諸島に生じているかも知れない利益は、大して長くは続かないであろうということが、懸念されるべきである。紡績業を経営し続けるために、5 年ほど前に、ある企てがなされた。紡績工に、現金の代わりに、密輸された酒類を支給したのである。勤労や、人々の健康と風紀に対して、これ以上に破壊的なことも、ないであろう。この企ては、一人の人によって反対された。しかし彼はひどく運が悪く、反対したことで法外な代償を払うことになってしまったので、それが私たちの時代のオークニー諸島で密輸を止めさせようと奮闘したおそらく最後となるであろう。この製造業に従事している何人かは、紡績工に酒類とオランダ製のタバコで賃金を支払っている。ほとんど言い忘れるところだったが、多くのオークニー諸島の地主たちとその妻たちは、過度の耐え難い負担となるほどの紡績の業務を、借地農に強要する。オークニー諸島では、土壤が大変適しているにもかかわらず、亜麻の種子が播かれることはほとんどない。もし大地の表面でさえ、それほど貧弱にしか栽培されていないとすると、大地の内部から、富の財源となるものが採り出されたということなど、耳にすることは期待できない。とはいえ様々な製造業に向けた地層が発見されるといったことは、ことによるとあるかも知れないが。ストロームネス²¹⁾やホイ²²⁾、その他の場所にある鉛の鉱床は、将来の世代にとって、豊富な富の源泉になるかも知れない。彼らの心意気と勤勉さは、彼らのなまくらな先代たちよりも、その恵みにより相応しいであろう。誰であれ、オークニー諸島で何らかの製造業をやってみたいという希望を持つ人は、ここでは賃金がそれほど高くないという後押しが得られるであろう。

21) オークニー本島南西部にあるオークニー諸島第二の都市。

22) オークニー諸島第二の島。

古家：トーマス・ヘップバーン『オークニー諸島の貧困』（1760 年）（1）

しかしオークニー諸島において、なかならず軽視されているのは漁業であると、私は見なしている。水産物は、隣のシェトランド諸島においてと同様に、ここでは国の主要産物になってもよさそうなものであるが、オークニー諸島は社会が極めて分裂しており、また住民の偏見も多岐に渡り、ほとんど矯正不可能なので、漁業にせよ、公共心に満ちた何か他の立案にせよ、創立していくのに充分必要なだけ、彼らのうちの何人かでも団結することは、ほとんど期待できない。水産業は、政府が適切な方法で助成した場合には何時であつても用立てた支出を、国に対してほとんど確実に償って余りあるものである。オークニー諸島は多くの優れた水夫たちを公益事業にすでに供給しているが、もし漁業が繁栄していれば、イギリスにおける船乗りたちの最高の育成所のひとつになっていたであろう。前世紀には漁業が、ある程度までは住民たち自身によって、部分的にはファイフや南の方の他の地方からやってきた外国人たちによって、ここでは大いに営まれていた。しかし今では、そして過去ほとんど 60 年に渡って、交易のうちのこの価値ある部門は極めて軽視されてきた。漁業は現在では、住民たちの貧困と困窮が、陸地が産出する乏しい生存の糧に付け加えるものを日々、海の中に捜し求めることを余儀なくさせる限りでのみ、営まれている。

VI 破壊的で違法な交易

密輸、あるいは不法交易は、広く行われているところではどんな社会でもそれが破滅のもととなるのであるが、次にこれについて考察してみたい。この害悪は、残念ながら過去 30 年に渡って、オークニー諸島で急速に広がってきたと言わざるを得ない。現在では、毎年密輸で持ち込まれるオランダ産の蒸留酒、オランダ産のタバコ、フランス産のブランデー、ワイン、ラム酒、お茶、コーヒー、砂糖などの価値は、控えめに見積もっても、この国の 1 年間の地代の 3 分の 2 に匹敵するほど、密輸が盛んになっている。島々や入り江、小さな湾が多数存在することが、この破壊的な交易が捕まえられる恐れを極めて小

さくしている。密輸業者たちは、ほとんど危険を冒さないで済んでいるのである。しかしもし地主たちや、この問題を懸念する他の人たちが、相応な精力と一致団結でもって、指導力を発揮する気にさせられることができるなら、この交易は廃止されるであろうのに、そうはならず、密輸はある意味では国全体の同意と一致団結をもって続けられている。これらの諸島の住民たちは、全ての面で互いに異質であり、どんな立案に際しても一致団結する気になれないのであるが、例外は密輸のように、健康と富に対して破滅的で、人々全体の風紀に対して破壊的なものに際してである。このような交易は、人々の精神を墮落させるだけでなく、体力や気力をも奪うのであり、この国の生来の病気である壊血病が昔よりも珍しくなくなり、常習的になってしまったこと、またこの人たちが怠惰であり、前世代の人たちほど多くの労働ができず、長生きでもないことは、ひとえにこの交易に帰せられるのである。この交易をめぐる最悪の事柄は、私たちも私たちの子供の世代も、その増進を食い止める見込みをまったく持っていないことである。

VII 奢侈

以上の説明から、オークニー諸島では私たちもそれなりに奢侈品にあやかっていることが、容易に推察できるであろう。実際にそれはかなりの量である。密輸品に費やされる分の他にも、かなりの金額が、小麦粉、ビスケット、男女の衣服のための服地、陶磁器、金物類、等々といった他の奢侈品の支払いのため、毎年この国から出て行くのである。オークニー諸島には、精白しない小麦粉を用いたパンの食品が、キースネスやサザーランド、ロスシャー²³⁾よりも多く存在すると、私は聞いたことがある。それはどうであろうと、オークニー諸島では、スコットランドのもっとも富裕ないくつかの州においてよりも、国の富に比例して、お茶やパンチ²⁴⁾、あらゆる種類の酒が多く飲まれており、絹

23) いずれもスコットランド本土の北部の州。

24) 酒、砂糖、湯または水、ミルク、レモン、香料などをパンチボールの中で混ぜて作る飲み物。酒を入れないこともある。

古家：トーマス・ヘップバーン『オークニー諸島の貧困』（1760 年）（1）

糸、ビロード、キャンブリック²⁵⁾、その他の美しい装飾品が多く使われていることは疑いない。

オークニー諸島では、奢侈は勤勉によって富が獲得された結果として出現したわけではない。あらゆる役に立たない流行のように、単に輸入されただけである。また現時点においても、勤勉によって維持されているわけではない。したがって、ここでは奢侈は、交易が繁栄している他の場所においてよりも、有害であるに違いない。

これらの閉鎖的な諸島では、少しでも身分のある一族なら、血縁で互いに結ばれている。部外者は、これら全ての家柄の良い人たちが自分の親戚の一族だったら、などとたやすく憧れてしまうであろう。またそのような憧れは、的外れでもないであろう。それゆえ血縁は盛衰よりも永続するため、多くの対等でない婚姻が存在するはずである。ところで盛衰の歩が男女どちらの側にあるとも、彼らが自分たちの勤労の報酬に合わせて生活水準を決めるわけではないことは、まず間違いない。それどころか彼らはむしろ、ある程度は生活用品の全てについて、彼らのうちの裕福な方の親戚の作法や慣習を模倣しがちである。このことがスコットランド大陸の側のほとんどの場所よりも、当地において、奢侈をより一般的なものにしてしまっている。女性の数が多いことがどのような影響を生ずるものなのか、私はよく知らないが、ほとんどの一族の次男以下の男たちが成功を求めて外国へ行くので、ほとんどの一族では女性の数が男性に対して、少なくとも 4 対 1 の割合になっている。すでに述べた物品の他にも、英貨 1,000 ポンドが馬の支払いのため、毎年オークニー諸島から出て行くのである。とはいえかなり良い世話と管理によって、馬はそのすべての目的にかなう頭数まで容易に繁殖するかも知れないが、管理失敗の実例もまた数え切れないほど多いのである。

これらすべての支出と帳尻を合わせるのに、オークニー諸島にはいくつかの確実な財源がある。そのうち最も重要で当てにできるのが、ケルプであり²⁶⁾、国内で多くの貧しい人たちを雇用するだけでなく、過去 20 年に渡って毎年英

25) 亜麻糸、綿糸で織った薄地の平織物。

26) コンブ目、ヒバマタ目の漂着性の大型褐藻。焼いた後のケルプ灰からヨードを採る。

貨 2,000 ポンドをおそらく私たちにもたらしたであろう。私たちの生産するバター、オリーブ油、牛革、子牛皮、ウサギの毛皮は、ことによるとさらに英貨 1,500 ポンドをもたらししている。特にストロームネスにおける戦時中の船舶の停泊は、英貨 1,000 ポンドをやや上回る金額を私たちに落としていくであろう。英国とアイスランドの自由に操業できる水産業に雇用されたり、また紡績業や、大麦や麦芽、オート麦の輸出により稼がれ、オークニー諸島の水夫たちによって持ち帰られたり送金されたりする金銭は、かなりの額に上るはずであるが、これらの商品価値を極めて厳密に算定することは不可能である。以上に述べられたこれら全ての事実を勘案した上で、もっとも確実と思われる見解、すなわち私たちの輸入は、私たちの輸出に対して 3 対 4 の割合であるという見解に従うなら、そしてさらに暴政と圧制が地主たちによって彼らの借地農たちに対して行われていることを前提とするなら、結論は「この国は貧しいに違いない」ということになる。

VIII 法律の効力を巧みにかいぐって行われる圧制

疑いもなく、あらゆる国にとって貧困のひとつの大きな原因は、どんな種類であれ暴政と圧制である。スコットランドは長い時代に渡ってその影響に見舞われてきたし、今現在でもことによると以前と変わらないほど、その影響に見舞われている。というのも私の考えでは、権力を目的とする軍事的な貴族制は、金銭と富を唯一の動機とする貴族制よりも高貴で気高いからである²⁷⁾。

圧制には二種類ある。ひとつはその地の法律にあからさまに反するような圧制であり、それゆえ法律で罰すべき種類のものである。もうひとつは古来からの慣習や既得権、貢租から、また貪欲や残酷さ、その他の原因から、結果として発生するような圧制であり、法律の効力を巧みにかいぐって行われる種類のものである。オークニー諸島では両方の種類の事例が挙げられるであろうが、前者はまれであり、その影響においても弱いのに対して、後者はスコット

27) それだけ一層、下層階層に対する圧制はひどくなりがちであるという意味である。ヘップバーンの反ジャコバイトの見解が示されている。

古家：トーマス・ヘップバーン『オークニー諸島の貧困』（1760年）（1）

ランド全土で一般的に見られ、いくつかの北部の州においては、オークニー諸島と較べてすら、より手ひどく行われている。この種の圧制は、すでに上で述べられた事項から成っている。すなわち短期の借地権、あらゆる種類の勤労の生産物で支払われるべき地代、新規借地契約料や借地契約更新料、非常に多くの、そしてさらに困ったことには、未確定で不明瞭な奉公などである。これらは絶えず改良を妨げ、借地農をひどい貧困と奴隷のような従属状態に貶めてしまうので、彼は無数の名状しがたい辛苦を頻繁にこうむることになる。これらの原因から発生する一つ一つの個別の圧制や、それらに引き起こされる様々な危害を列挙することは、全く不可能である。

しかしながら圧制がこの国の貧困の原因のうちのひとつだと私が認めたからには、誰がその圧制者なのかについて、あなたに指摘しておくことは必要であろう。通常の設定では、圧制は権力の側からなされるということになるが、本当に事実はあまりにもしばしばその通りである。

オークニー諸島では、圧制者はモートンか、あるいはいわゆる永代租借地権者や土地自由保有権者のどちらか²⁸⁾、またはその両者共であるはずである。この事柄で判断を下すための確実で信頼できる唯一の物差しは、彼らの借地農が置かれている状態と境遇である。彼らが幸福であれば、それは雇用者が寛大であることをはっきりと示しているし、彼らが不幸であれば、それは圧制が行われていることを示している。

土地差配人による監察に直接さらされているモートンの地所の借地農たちは、国全体の中で最も繁栄しており、幸福で勤勉である。彼らは同じ身分の他の人たちよりも良い服を着て、恵まれた生活をしている。彼らは期限を守って地代を支払い、またそうするだけの十分な能力があるのだが、それは彼らの地代の半分以上が貨幣で支払い可能となっており、しかも低めに貨幣換算してもらっているからである。私はこれらの借地農たちを、農業における改良について自身も無知であり、古来からの既得権に束縛されているような窮乏した地主たち

28) 土地の自由保有制 (udalism) は、封建制以前に北欧を中心に広く見られ、かつてのノルウェー王国による支配を通じてオークニー諸島、シェトランド諸島に持ち込まれた。現在でも一部残存している。

の下で働く借地農たちと較べようとは思わないが、しかしギャロウェイの借地農たちと較べることは差し支えないであろう²⁹⁾。ギャロウェイはモートンがオークニー諸島で持っているのに引けを取らないほど優良な地所を当地に持っており、しかも階級でも爵位でも同等なのである。

私は断言するが、ギャロウェイの借地農たちは、オークニー諸島で最も卑しい家臣の借地農たちに劣らず哀れである。彼らはそれよりもひどいと私は思う。というのも私はキースネスにおいてさえ、貧困や不幸、あらゆる種類の悲惨さに関して、私の目に映る限りでの閣下〔ギャロウェイ〕の借地農たちよりもひどく陰鬱な様子を、かつて見た覚えがないからである。

それと同時に確かなのは、モートンの借地農たちのうち、オークニーの本島から遠く離れて別々の島々に住んでいる人たちに関しては、彼の土地差配人が直接に、あるいは定期的に監察することが不可能であり、その多くが貧しく、あるいは少なくとも地代の支払いが大きく滞っていることである。しかしこのことについては、彼らの雇用者による圧制のせいにするまでもなく、いくつかの明白な原因を挙げることができるであろう。ひとつの客観的で重要な原因は、彼らの多くが、〔モートン配下の〕他の家臣たちの借地農たちに混じって、離ればなれの土地を耕作していることである。しかも閣下〔モートン〕にとって、また彼ら借地農たち自身にとって不運なことには、彼らのうちの何人かは、モートンに対してだけでなく、彼の家臣に対しても借地農であることである。

この部類の借地農たちの貧困を、閣下〔モートン〕にも彼の土地差配人にも責任転嫁できないことは、以下に挙げる事柄を知らされれば、あなたも容易に認められることであろう。

すなわち彼らが支払うべき多額の未払いの地代が残っているにもかかわらず、彼らが退去させられる事例は稀であることである。いかなる奉公も彼らに強要されることはない。また彼らの地代は引き上げられるどころか、相当な削

29) ここも原文では頭文字の G だけで、残りは伏字になっているが、本訳文では「ギャロウェイ」と明示する。ここで問題のギャロウェイ (Alexander Stewart, the 6th Earl of Galloway, 1694-1773) は、後述のジェイムズ・ステュアート卿の死後、その所領を継承し、「バンドラー訴訟」で反モートン派の先頭に立った貴族 (Fereday [1980], 125)。

古家：トーマス・ヘップバーン『オークニー諸島の貧困』（1760 年）（1）

減がなされてきた。境遇が良かれ悪しかれ、わずかばかりの借地契約更新料や新規借地契約料が彼らのうちの誰かに要求されたこともない。

もし私が正確に知っているとするれば、[モートンの] 土地差配人の監察の下で暮らしている他のより裕福な借地農たちから取り立てられる借地契約更新料は、現職の土地差配人が関係してきたここ 20 年近くに渡って、全て合わせても英貨 17 ポンド 15 シリング 8 ペンス、あるいはスコットランド通貨で 213 ポンド 8 ペンスに達しない。どう見てもこれは、年間で英貨 500 ポンドの地代を上げる所領における取立てとしては少額であり、地主 [モートン] にしても彼の土地差配人にしても、圧制者としての馬脚を現すことから程遠い。[ひるがえって] 私としては、当地の教区地主たちの慈愛心について、何か賞賛のひとつでも言えればよかったと思うくらいなのだが、彼らのうちの何人かは、他よりもひどいものである。

先へ進む前に、私があなたに認めなければならないのは、私がこれらの諸島の住民たちの間で勤勉さ、洞察力、団結力が欠如していることに思いをいたすとき、農業、水産業、製造業を現在の衰退して行く状況から復興することは、すでに述べた閣下たちがそれらに支援を与え、彼らの庇護の下にそれらを奨励し、彼らの利害でもってそれらを援助するよう尽力しない限り、ほとんど不可能であると考えてしまうことである。そのようにすることこそ、彼ら閣下たちの割に合うことであろう。そうでなければオークニー諸島において、特に水産業によって、どのようなためになることが成され得るのか、世間が精を出して注意力を働かせてみても、意味がないであろう。

以下に挙げる事柄は、ここまで私が述べてきたことを、さらにあなたに分かりやすくするのに役立つであろう。

ポモナ³⁰⁾、あるいは本島では多くの借地農たちが、年間の地代をスコットランド通貨で 20 から 30 ポンドすら払っておらず、3 人の雇用者 [つまり地主] に仕えている。それらの地主たちの所領は、年間の地代がスコットランド通貨で 100 マークを超えることはなく³¹⁾、中には 50 マークを超えない所領の

30) 「ポモナ」は、オークニー本島の別称。

31) マーク (merk) は、イングランド、スコットランドのかつての通貨単位で、1 マークは 13 シリング 4 ペンス。

地主もいる。しかしながら彼らはすべて、彼らが共同で配下に置く借地農から好き勝手に奉公を要求する。このような借地農の境遇は哀れむべきものではないだろうか？ オークニー諸島には、年間の地代がスコットランド通貨で 300 マークで、子牛や子羊、家禽を育てたり、その他様々な種類の過酷な負担に加えて、その新規借地契約料が 3 年間ごとにスコットランド通貨で 400 マークに達する所領がいくつもある。

モートンが「配下の地主である」家臣たちに対して、大麦の年貢として英貨 4 シリングを、あるいは麦芽の年貢として英貨 7 シリング 6 ペンスを要求するのに対して、「モートンの家臣の地主である」雇用者のなかには、恥知らずにも自身の借地農たちから前者として英貨 5 シリングを、後者として英貨 10 シリングを要求する者たちがいるのである。これは卑しい地主が持つ残酷さであるが、まさに今年、ギャロウェイの借地農たちはこのようなやり方で食べ物にされてきたのである。

(以下次号)

参考文献

1. 原典

Hepburn, Thomas [1885] (1760), *A Letter to a Gentleman from his Friend in Orkney, containing the True Causes of the Poverty of that Country*, William Brown, Edinburgh.

2. 一次文献

Buchanan, George [1733] (1582), *Buchanan's History of Scotland*, printed by J. Bettenham, for D. Midwinter and A. Ward; A. Bettsworth and C. Hitch, and J. Batley; E. Curll; C. Rivington, and J. Wilford, London.

MacKenzie, James [1836] (1750), *The General Grievances and Oppression of the Isles of Orkney and Shetland*, Second Edition: Laing and Forbes, Edinburgh.

Moll, Herman [early eighteenth century], *A New and Correct Map of the Whole World*, London.

古家：トーマス・ヘップバーン『オークニー諸島の貧困』（1760年）（1）

Torfaeus, Tormodus [1866] (1697), *Ancient History of Orkney, Caithness and the North*, tr. The Reverend Alexander Pope, Wick.

3. 二次文献

Adams, Ian H. [1976], 'Agrarian Landscape Terms: A Glossary for Historical Geography', Institute of British Geographers, Special Publication No. 9, London.

Fereday, R. P. [1980], *Orkney Feuds and the '45*, Kirkwall Grammar School, Kirkwall.

Frasers, Sir W. [1876], *Earls of Cromartie*, Edinburgh.

Furuya, Hiroyuki [2003], 'The 'private vices, public benefits' controversy: the response of the Scottish Enlightenment to Bernard Mandeville', PhD Thesis, University of Edinburgh.

'Pundlar Process', printed legal papers, 333Y, Orkney Library.

Thomson, William P. L. [1987], *History of Orkney*, The Mercat Press, Edinburgh.